私大環協ニュース

私立大学環境保全協議会
第75号 2023.12

Environmental Protection Association of Private Universities NEWS

第36回夏期研修研究会（2023年8月31日9月1日創価大学：ハイブリッド開催）

グループ討議（オンサイト・ライブ）会場の様子

講演（オンサイト・ライブ・オンデマンド）会場の様子

CONTENTS

環境ニュース●倉元隆之准教授インタビュー 2
会員校紹介●岩手医科大学 4
会員校紹介●大妻女子大学 5
賛助会員紹介●株式会社環境向学 6
賛助会員紹介●株式会社そごう・西武 7
コラム、事務局だより 8

環境ニュース

東海大学
教養学部人間環境学科
倉元隆之 准教授インタビュー

研究者としての軸が見えてきた チョルノービリ訪問

登山で酷使して火照った体を優しく冷やしてくれる湧き水も、生活排水や産業排水を含んだ河川の水も、そして子供の遊び道具となる道路に溜まった雨水も、すべて同じ「水」です。しかし、その中身はまったく異なります。私たちの体が生活習慣や食生活に影響を受けているとの同じように、「水」もまた、人間活動や自然的、かつ社会的な特色や個性が色濃く反映されています。こうした“水の健康診断”を通して、地域の水環境や地球の気候変動に関する研究をしているのが、東海大学教養学部人間環境学科で准教授を務める倉元隆之氏です。研究者に至ったきっかけを次のように懐古します。

「私の研究室の本棚に並んでいる本、ほとんどの背表紙の角がピンと立っているでしょう(笑)。昔から机に向かった勉強が大の苦手で・・・・・・、でも忘れもしない1995年1月、あの阪神・淡路大震災が起きた。私の出身は岡山県で、震源地から100キロ以上離れているにもかかわらず物凄い揺れを感じましたし、当時、私は高校生で、よく授業中に教室の窓から『新大阪－岡山』間を走る新幹線を眺めていたんだけど、そうした日常の風景もその日を境に失われた。地震が残した爪痕は悲惨で甚大であったものの、その一方で、自然を前にしたときの人間の脆弱さや、社会を無力化する自然の力強さに驚きも隠せませんでした」

阪神・淡路大震災をきっかけに、アースサイエンス(地球科学)に強い関心を抱くようになった倉元氏。高校卒業後に進学した信州大学理学部物質循環学科で、とある“縁”に恵まれます。

「恩師との出逢いです。私が入学する半年前に信州大学に赴任され、もともとは私の第一志望だった大学で教鞭を執っていた方でした。何を話すわけでもなく、どんな研究をしているのかまったく分からずでしたが、学科のガイダンスの先生紹介で初めてその姿を見たときに、シンパシーを感じたというのかな、凄く気になる存在となったのを覚えています」

当時、「恩師」は南極地域越冬観測隊員として現地に1年半ほど赴くことになっていたため、倉元氏が2年次のときは直接授業を受ける機会はなかったそうです。しかし、倉元氏が3年生にあがる頃に「恩師」は帰国。倉元氏は彼の研究室に所属することになります。

「特段と興味が湧く研究テーマもなく、言われるがまま連れていかれた雪氷学会。その道の専門家が発表する研究成果は専門的で難解過ぎて頭に全然入ってこない。それでも何かしらの影響を受けていたのでしょうね。帰り道に、川の水とか、雪とか面白そうと呟いたら、『恩師』が急に眼の色を輝かせて『だったら毎週、川から水を汲んできて』って。そこから毎週、カモシカが突然飛び出してきたり、猿に囲まれたりするような大学の演習林にある名もなき川に水を汲みに行っては研究室でそれを分析する。そんな生活が博士課程を修了するまで6年くらい続きました。でも、自分のペースで研究できるのも性に合っていたし、『恩師』のもとに研究データのグラフや図を持っていった際の『不思議だね。面白いね』という反応も嬉しかった。面白いや不思議の答えを自分なりに探す、その過程もまたとても刺激的でした。こうやって改めて振り返ると、私が行きたかった大学から来た『恩師』との出逢い、雪氷学会の聴講、恩師の答えを教えない姿勢など、ありとあらゆるものが数珠繋ぎのようで、自然の持つ神秘さに通ずるものがありますね」

大学院の博士課程を修了した後、第52次日本南極地域観測隊員など、研究者として実績と経験を重ねてきた倉元氏にとって大きな転機となったのが、2015年から2018年に携わった福島県環境創造センターでの研究活動です。

「東日本大震災による福島原発事故の汚染水処理問題の一環として、主に川・湖・沿岸の水中に含まれる放射性セシウム濃度を測定・分析する研究を行いました。当時、福島県と国際原子力機関(IAEA)との間での協力プロジェクトの一つで、海外の専門家がチョルノービリ事故やスリーマイル島事故を引き合いに出しながら、様々なデータやアドバイスを共有してくれたのですが、自分が現場肌な人間ということもあってか、当事者意識が芽生えず、他人事の域を出なかったんです」

そこで、チョルノービリの視察を県に提案し、現地を訪れることに。現地での体験は衝撃の連続だったそうです。

「例えば、人間以外の動植物が住めるまでに回復した自然の生命力、地元の伝統文化を守ろうとする活動、故郷に戻れない人たちの悲痛な思いなど、会議からは見えてこない別の真実にたくさん触れることができました。同時に、研究者である以上、客観的なデータで示すことは大切ですが、研究対象のバックグラウンドを理解して研究に向かわないといけないと痛感しました。社会学や文化人類学の視点を取り入れた科学的な研究と分析。チョルノービリ視察は、自分の研究者としてのスタンスを見出してくれた体験になりました」

チョルノービリ視察の様子

倉元氏の研究対象であり、生命の源のひとつである「水」。

その研究の裏には、数値やデータだけでは見えてこない壮大な物語が隠されているのかもしれません。

社会を映し出す「水」は多くの事を語りかけてくれる

倉元氏は、東海大学のある平塚市を中心に研究活動を行っています。平塚市の水環境事情をこう解説します。

「平塚市は商工業都市として栄え、北には日本百名山にあげられる丹沢山、南には日本3大深湾の一つである相模湾に挟まれています。また、それぞれが10キロ圏内にあります。自然環境と人間の生活圏が非常にコンパクトに集約された平塚市は、水の動きがダイナミックな地域です」

大学近くでの河川調査を行う授業の様子

現在は主に、同大学の屋上、秦野市にある山の5か所、平塚市南部の市街地9か所で、雨を定期的に採取していると言います。

「人間活動や自然環境の特性を映し出す『水』ですが、その水環境の変化や違和感に気づけるように、今はそれぞれの水質のスタンダードな状態を解明している最中です。想定した結果のものが多く、例えば、田畑が密集した箇所では土由来のカルシウムが豊富に含まれていますし、商工業地域では化石燃料を燃やした際に出る窒素酸化物（NOx）や硫黄酸化物（SOx）が多く含まれているのがわかっています。しかし、山の水質調査では不思議な現象も観測されています。山の観測地点は山麓から山の端まで200m刻みで5か所設けているので、上流から下流に向かってある物質の濃度が高くなっていくなど、何かしらの類似性やパターン性が見られるのが定石なのですが、とある場所だけ他の場所で採取した『水』には含まれていない物質が混ざっています。その地点で人為的な営みや建物があるわけでないので、それが地形によるものなのか、はたまた特殊な原生林があるのか、いまだ謎は解けていません。早く原因を解明したいですね。また、pH5.6以下の雨は酸性雨と呼ばれていて、調査対象の山で降る雨の多くのそれはおよそpH4台。昔ほど騒がれなくなっているものの、湘南地域の大気が決して綺麗になっているとは言い切れません」

研究室の学生との湧水調査の様子

大学近くの水に含まれる物質循環の研究と並び、倉元氏は地球の気候変動に関する研究にも携わっています。2010～2011年には、第52次日本南極地域観測隊員として南極を訪れています。

「南極やグリーンランドの内陸に降り積もった雪は、夏季を迎えても融けないので雪の中に含まれている大気成分や火山灰などを閉じ込めたまま氷になります。つまり、長い年月をかけて作られる分厚い氷である氷床には、その時代の自然環境の記録が残されているということです。現在、南極の氷床には100万年前までのログが、かたやグリーランドの氷床には12万年前までのログが残されていると言われています。この氷床を専用のドリルで掘削して採取した円柱を『氷床コア』と言いますが、この氷床コアから地球規模の気候変動のメカニズムを解析するプロジェクトに関わっています。2023年の秋には、100万年前の自然データが刻まれている氷床コアを掘削するため、日本の観測グループが南極に向けて出発する予定です。ここに何かしらの協力ができないのか現在、画策中です」

北極の海氷上での積雪試料採取の様子

大局的に地球環境のリズムを把握することは重要な視点です。しかし、今の自然環境が当たり前だと思うことに対して警鐘を鳴らします。

「ほんの20年くらい前は夏に30度を超えると大騒ぎしていたのに、最近では35度くらいにならないと話題にもならない。そして多くの人が、夏の35度を普通だと思ってしまっています。戦争体験者がいなくなり平和ボケが蔓延してしまうのと同じくらい、『地球の気温が高いのが当たり前』と、感覚が麻痺するのは危険なことだと思います」

目の前に当たり前に在る「水」は、私たちに多くの事を語りかけているのかもしれません。

肌で感じることの重要性と教養力を磨いてあげたい

研究者と教育者の顔を持つ倉元氏は、研究を通して学生に伝えたいことをこう話します。

「現場百遍という言葉が示す通り、現場感覚とは、実際に現場に足を運んでこそ感じ取ることのできる感覚。私が実際にチョルノービリを訪問して会議からは見えてこない現場の空気感や自然環境を肌で感じたように、学会聴講、会議、ネットリサーチからは見えてこないリアルな真実が現場にはあるし、実際に現場を観ることがアイデアの源泉になることも少なくない。研究対象となる地域に実際に足を運んで、自然の特徴はもちろん、そこに住む人々の想い、文化や伝統を理解して、それを土台に研究成果を上積みしていく。そんな研究姿勢を身につけてもらえたら嬉しい。また、そうした体験価値が唯一無二である点も伝えたいですね」

大学院生との河川源流域で河川調査の様子

その他にも、「温故知新や一期一会の重要性も知って欲しい」とは倉元氏。さらに、東海大学の人間環境学科は教養学部に属する学科です。「自然環境の専門性だけでなく、教養力も磨いて欲しい」と倉元氏は続けます。

「答えがない問題や予測し難いことが頻発するこれからの社会で、自分らしく幸せに生きるには『教養力』は欠かせません。自分が関心のある分野に対しては、常識を疑う姿勢を常に持ち続けて欲しいです。また、人付き合いでも何でも構いませんが、学科で学んだこと、吸収したことが1つでも、その後の人生を後押ししてくれたら。そういう武器を授けられるような教育を目指したいですね」

インタビューを終えて

酒蔵巡りも好きと話す倉元氏は、これまで縁のあった長野県と福島県の日本酒が大のお気に入り。休日は、お酒を飲みに行ったり、撮り溜めした、大好きなお笑い芸人・明石家さんまの番組を見ながらトークの分析をしているそうです。

会員校紹介

このページでは毎回、会員である大学の環境問題への取り組みを紹介していきます。

岩手医科大学

矢巾キャンパス全景

大学紹介

本学は、盛岡市内丸地区に1897年に創立した医学講習所・産婆看護婦養成所を併設する私立岩手病院を出発点としております。現在では医療の常識となっている「チーム医療」の重要性を明治時代に見込み、実践いたしました。建学の精神「誠の人間の育成」は、脈々と受け継がれ、永きに渡り、医療人の育成、地域医療に貢献しております。

2007年には、盛岡市内にある内丸キャンパスに加え、新たに盛岡市の南に隣接する矢巾町に矢巾キャンパスを開設し、薬学部を新設、2011年には医学部・歯学部基礎部門の矢巾移転、続いて創立120周年を迎えた2017年には、看護学部が開設され、我が国で初めて、医・歯・薬・看の4学部を同一キャンパスに揃えた医療系総合大学となり、学部の垣根を超えた世界的にもユニークな教育を実践し、総合的な医療人を育成しております。また、2019年には、北東北・北海道で最大の1,000床規模の病院を矢巾地区に移転開院し、盛岡市内丸地区の旧附属病院は、内丸メディカルセンターとして高度外来専門機能を有する病院として、両病院が連携した一体的な運用を開始しました。

環境への取組み

本学は、2011年に発生した東日本大震災を経験しております。岩手県では長期に渡る停電と重油供給が停滞したことから、震災直後は大学機能を制限し、残った重油で附属病院(現内丸メディカルセンター)の機能維持に注力しましたが、CTやMRIなどの診断機器は停止し、暖房も使用制限を余儀なくされました。このような背景から、移転開院した附属病院に併設するエネルギーセンターでは、大規模災害などで、外部からエネルギー供給が途絶した場合でも、支障なく医療体制を整えることができるよう、使用するエネルギーを1週間程度は供給できるシステムを備えております。

附属病院とエネルギーセンター（右側）

ディーゼルエンジン

当センターは、安定した電力供給を行うことができる特別高圧受変電設備を備え、燃料種を都市ガス、A重油の二重化とし、冗長化を図ったコージェネレーションシステム(ガスエンジン3台、ディーゼルエンジン2台を組合わせたシステム:1台当たり出力700Kw)等により、1週間程度はエネルギーを自立供給できる機能を備えるだけではなく、そのシステムの排熱を有効利用した熱源機器類の運転、太陽光発電設備及び蓄電池、地中熱利用設備(地中熱ヒートポンプと連結した蓄熱槽)といった再生可能エネルギーの積極的な活用、外気温度の低い地域特性を活かしたフリークーリングの実施などにより、電力負荷の平準化、省エネルギー化も実現しております。このほか、附属病院で使用する電源及び熱源供給に限らず、近隣の岩手県立療育センターや岩手県立盛岡となん支援学校に対しても電源供給しており、大規模災害が発生した際は1階の会議室を近隣住民の避難所として提供する防災協定を自治体と締結し、地域社会にも貢献しております。

ガスエンジン

大妻女子大学

千代田キャンパス

大学紹介

大妻女子大学は、明治41年（1908）年に創立者大妻コタカが裁縫・手芸の私塾を開いたのが始まりです。創立当初から「女子も自ら学び、社会に貢献できる力を身につけ、その力を広く世の中で発揮していくことが女性の自立につながる」と確信して女子教育に尽力し、現在では家政学部、文学部、社会情報学部、人間関係学部、比較文化学部及び大学院人間文化研究科を擁する学生数6,500人強の総合大学に発展しました。

近年「データサイエンス」「SDGs」「リーダーシップ」に関する科目を新設し、現代社会の課題を自分事として捉える能力を身につけられるよう、この分野に力を入れています。

学生が主体となったサステナブルなファッションブランドの創設と教育・研究の推進

マールトウキョウ
商品写真（ブラウス・スカート）

現在、国内で流通する衣類の約98.5％が海外製で、国産品はわずか約1.5％と示されています。そこで、大妻女子大学家政学部被服学科・吉井健教授のゼミ（ファッションビジネス研究室）では、国内のファッション産業の振興、サステナブルなファッションビジネスの教育・研究の推進、そして持続可能な社会の実現を目的として、SDGsを意識したファッションブランド「m_r tokyo（マールトウキョウ）」を2021年に立ち上げました。当プロジェクトでは、国内の複数の繊維メーカー、商社、縫製工場等と提携し、環境にやさしい素材を使用した、高品質で長く愛用できる商品を、無駄に資源を使わない受注生産方式で提供しています。

当プロジェクトにおいて、商品の生産・販売は企業が行いますが、ゼミナール学生は、全体のブランドコンセプトの立案、ターゲット（女子大学生）に合わせた商品企画、販売計画の立案、ブランドサイトの運営、そしてSNSを活用したプロモーションなど、プロセス全体に主体的に取り組んでいます。衣類の大量生産と大量廃棄が社会問題になっている中、学生達は、環境に配慮したサステナブルな企画を通じて学びを深めています。

当プロジェクトでは、多角的かつ発展的に多くの企業とのコラボレーションを行い、継続的に社会に向けて発信してきました。例えば、三井不動産商業マネジメント株式会社（東京都中央区）が運営する「三井ショッピングパーク・ららぽーと」にて、22点の「マールトウキョウ」新作サステナブルファッションを紹介するイベントを実施し、話題を集めました。また、株式会社モスフードサービス（東京都品川区）との間では、モスバーガー創業50周年を記念し、環境に配慮したサステナブルなTシャツを共同で企画しました。さらには、モリトアパレル株式会社（東京都台東区）とのコラボレーションにより、廃漁網を原材料の一部としたサステナブルなバッグを学生が企画し、その企画商品が第38回日本かばん技術創作コンクールにて「日本商工会議所会頭賞」を受賞しました。

マールトウキョウバッグ
日本商工会議所会頭賞受賞

また、ゼミナール学生は、様々なシンポジウムにも参加し、サステナブルファッションの重要性を訴えています。例えば、2023年6月20日に開催された消費者庁主催の「サステナブルファッションに関する日EU国際シンポジウム」では、ゼミナール学生がパネリストとして登壇し、企業の方々とサステナブルファッションについて議論すると共に、「マールトウキョウ」での学びについても語りました。

今後も本研究室では、持続可能な社会を目指して、学生が主体となって企画したサステナブルファッションを発信していくと共に、充実した教育と研究に取り組んでまいります。

サステナブルファッションに関する日EU国際シンポジウム

賛助会員紹介

株式会社環境向学

Aqua Street
アクア ストリート

私達の会社の概要と行動記録です。

環境省
2010年マイボトルマイカップ運動

1989年 1 月 31 日 会社創立

- **水を汚さない。**
- **水を無駄にしない。**
- **水浄化技術を駆使し地球環境の保全に貢献する。**

1995年

- スーパーマーケット向け「**マイボトル**による**純水自販機**」開発。
- 2000年以降、技術供与会社により全国展開が図られた。
- スーパーマーケット1社で、**年間12,720トンのCO_2排出削減**に貢献。

2008、2009年

- LOHAS イベント：**「容器を使い捨てしない飲料水供給方法」**を提案。
- **「ウォーター リフィル ステーション：水再充填」**として大賞受賞。

2016年

- **放射性物質除去浄水装置として**
  世界初第三者認証取得
  NSF International Official Listing

on May 23, 2016.

2019年 3 月 31 日

- (社)浄水器協会JWPA技術委員として**JIS規格原案作成参加**。
- RO逆浸透膜浄水器に関するJIS規格が公示された。

2019年 3 月

- 慶應義塾三田キャンパスに**災害用浄水装置導入**。
- **災害時**は、緊急用浄水システムとして**貯留水を飲用化**。
- **常時**は、マイボトルを利用した純水給水機として**CO_2排出削減**に貢献。

災害時用!

会社概要

社名：株式会社環境向学
創立：平成元年1月31日
所在：東京都大田区上池台2－40－11
ＨＰ：https://aqua-street.com/

株式会社そごう・西武

【会社概要】

■ 会社名：株式会社そごう・西武
■ 創　業：天保元年（1830年）
■ 店舗数：10店舗
■ 本社所在地：東京都豊島区南池袋1-18-21　西武池袋本店 書籍館

【事業概要】

■ **店舗事業**
全国に10店舗を展開。フルラインアップの大都市型店舗からデイリーニーズにお応えするショッピングセンター型店舗まで立地特性を生かした多様な店舗展開をおこなっています。

■ **商事事業**
そごう・西武の持つマーケティング力とビジネスネットワークで全国2,000社の企業・団体のあらゆるニーズにお応えしています。

■ **海外事業**
台湾、香港、マレーシア、インドネシアで、現地企業運営の「SOGO」29店舗、「SEIBU」3店舗の百貨店にライセンス（商標貸与）しています。

【環境・社会貢献活動の取り組み】

1999年に百貨店として初めて、環境に関する国際規格「ISO14001」を取得し、そごう・西武各店、各事業所で環境活動を推進しています。また、そごう・西武の環境方針では、「お客さまやお取引先、地域とともに取り組む、次世代に続く豊かな暮らしづくり」を基本理念に掲げています。お客さま一人ひとりのやさしいお気持ちを社会貢献団体におつなぎする活動として、「盲導犬育成支援」は2003年から。「植樹・育樹」「途上国支援」は2009年から継続して推進し続けています。

盲導犬育成支援活動

盲導犬を必要としている視覚に障がいのある方のための募金活動だけではなく、お客さまに向け定期的に啓発キャンペーンを開催しています。全店舗に常設している盲導犬をかたどった大型募金箱には、それぞれ名前が付けられており、お客さまにも可愛がっていただいています。

途上国支援

そごう・西武では、お客さま参加型の途上国支援を推進しています。お客さまから使わなくなったこども靴をお預かりし、国際協力NGOジョイセフを通じてザンビア共和国に送ることで、こどもたちの足を寄生虫病や破傷風から守る活動につながっています。

植樹・育樹

プレゼントギフトが植樹・育樹につながる「グリーンラッピング」を行っています。これは、お客さまがプレゼントギフトをご注文の際に、税込100円のグリーンラッピングをお選びいただくと、その内の50円が認定NPO法人環境リレーションズ研究所への寄付となり、80件で1本分の植樹につながる活動です。また、お中元やお歳暮の簡易包装は4,000件、お買い物袋のご辞退は1万枚で、それぞれ1本分の植樹につながります。

SEIBU
SOGO

コラム

クールダウンは、なかなかに難しい！

これまでに経験したことがない暑さが長く続いたこともあるが、秋を感じる間もなく、冬の気配が迫っているようである。定年を機に、今年度から徐々にクールダウンして、のんびりムードに移行していくつもりが、気候と同じく、思うに任せず、昨年度までの連携先との複数の企画が継続中である。

沖縄の活動では、ごみの問題をテーマとした出前授業の実施範囲が、連携している離島にある全ての小学校に広がり、のんびりとは程遠い状況である。沖縄県では、海岸打ち上げごみの問題が、深刻な状況にある。これまでの出前授業を通じた教育研究活動を、現地の教育現場が評価してくれたということで、うれしい限りではあるが、小学校だけではなく、その離島の中学校や高校にも、内容のレベルを変えて広げたいという教育長の方針で、話がだんだん大きくなっている。

地元（神奈川県湘南地区）では、昨年度同様に、「地域への理解を深める」ことを目的とした児童対象の出前授業を継続中である。現在、進学を契機に都市圏に転出した若者世代が、出身地に回帰せず、大都市圏への一極集中による地方の疲弊が進み、危機的状況にある。Ｕターン行動を促すには、生活基盤が整っていることに加え、意識の問題も重要とされている。生まれ育った地元で、人と自然との絆が深いほど、それらがない場合に比べ、地元に戻るチャンスがあれば戻りたいと考える割合が多い事が報告されており、これらを背景とした取り組みである。

北海道の企画は、これから本格的に冬のプログラムを調整していくことになるが、ＮＰＯの学生会員の自己啓発を目的に、非日常を経験させることに集約すればよいかと考えている。スノーシューでの雪の里山散策、イグルーづくり、国際ルールでの雪合戦などの体験メニューを検討中である。

どの企画も、給与が発生する大学の授業ではなくなったことから、その点の義務や縛りがなく、自由度が拡大したところは、これまでと異なっている。連携企画の目的にのみ、焦点を当てればよく、ストレスは幾分減った気がする。夏季の企画がすべて終了した今は、社会貢献の範囲が拡大したと思えばよいかと、自身で妙に納得している。

私立大学環境保全協議会　名誉会員　藤野　裕弘
（NPO法人東海大学地域環境ネットワーク理事長、元東海大学教授）

事務局だより

設立40周年記念式典および第40回 総会･研修研究会ご案内

【日　時】
2024年3月14日(木)　13:00～13:50 総会
14:30～17:30 記念式典
18:00～19:30 記念祝賀パーティ
2024年3月15日(金)　9:00～15:35 研修研究会

【会　場】
早稲田大学国際会議場　井深大記念ホールほか
〒169-0051　新宿区西早稲田1-6-1

【参加費】1 名 10,000 円
※総会のみにライブ配信で参加する場合は参加費不要です。

【プログラム】
[第１日]　2024年3月14日（木）
＜総会＞　13:00～13:50
＜記念式典＞
1．開会挨拶　14:30～14:35
私立大学環境保全協議会会長
2．開催校挨拶　14:35～14:40
早稲田大学　総長　田中　愛治
3．来賓祝辞　14:40～14:45
大学等環境安全協議会　会長　大島　義人
4．記念特別講演　14:45～15:45
㈱三菱総合研究所理事長･(一社)プラチナ構想ネットワーク会長
小宮山　宏（第28代東京大学総長）
◇デモ展示見学･休憩　30分◇
5．記念講演　16:15～16:45
私立大学環境保全協議会顧問･前会長　松本　道明
6．表彰　16:50～17:20
功績者表彰･功労者表彰･代表者挨拶
7．閉会挨拶　17:20～17:30
私立大学環境保全協議会副会長
＜記念祝賀パーティ＞　18:00～19:30
[第２日]　2024年3月15日（金）
＜研修研究会＞
1．開催挨拶　9:00～9:10
私立大学環境保全協議会会長
2．生物多様性に関する講演･事例紹介･パネルディスカッション
9:10～10:50
◇デモ展示見学･休憩　20分◇
3．カーボンニュートラルに関する講演　11:10～12:00
4．講演総括　12:00～12:10
5．グループ討議(オンサイトのみ)　13:10～15:35
※Ⅰ～Ⅲグループから一つ選択してご参加ください。

Ⅰ：教育と連携「教育と産学の連携による SDGs の達成に向けて（大学コンソーシアム八王子の取り組み）」
「大学コンソーシアム八王子」による、学生の自由な発想や企画を地域の活性化に活かす取り組みをとおして、SDGs 達成のための持続可能な産学連携について活発な討議を行います。

Ⅱ：化学物質「新たな化学物質規制体系に向けた対応について」
前回までのグループ討議で取り上げた、化学物質規制体系の見直しについて、大学での取組み事例等、最新情報をもとに改めて取り上げ、複数のグループに分かれて、テーマに応じた意見交換などを行うことを予定しています。

Ⅲ：施設・設備
「カーボンニュートラル実現に向けた大学における取り組みについて」
カーボンニュートラル実現に向けた取り組みを計画と運用の2つの段階に分け、専門的な知見をお持ちのコーディネータの皆様を交えて、討議・意見交換などを行います。

＊＊＊＊＊＊＊＊

詳細は、開催案内（1月12日配信予定）にてお知らせいたします。プログラムは変更となる可能性がありますので、最新の情報を協議会ホームページにてご確認ください。なお、講演会来場者への資料配布は行いませんので、事前配信資料をご利用ください。

私大環協ニュース
第75号　2023年12月発行
発行・編集　私立大学環境保全協議会
Environmental Protection Association of Private Universities
〒169-8555
東京都新宿区大久保3-4-1 早稲田大学環境保全センター内
TEL & FAX　03-5273-9605
印刷　（株）研恒社

GREEN PRINTING JFPI P-K10002
ミックス 紙｜責任ある森林管理を支えています FSC® C016129
VEGETABLE OIL INK

第37回夏期研修研究会は2024年夏に金沢工業大学にて開催を予定しております。